

学習形態 Zoomでの講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ(12)

(皆様ご苦労様です。私の最近の心境ですが、親鸞聖人が越後に流されたとき、越後の人たちと話が通じたんだろうか、という疑問が出てきまして。今でこそ方言もだいたいの所理解して頂けますが、聖人がはじめて行かれた越後弁を理解出来たのんだろうか、という疑問が起こっています。そのころの聖人は都から一歩も出ていないはずでありますから、そしてその当時の生活は今みたいに情報が進んでいるとも限りません。そして通訳みたいな側人などもおられなかったと思うと、越後の人々とどう会話をしたんだろうか、などと想像しては楽しんでます。もしかしたら、恵信尼公が通訳していたかも、ね。)

前回より『末巻』に入った訳ですけど、予想どおりなかなか読めないところであります。第一最初の御自釈の文からとまどってしまいまして、皆さんのお力を頂戴したところでした。と致しましても、「異執を教誡する」と言うことの重要性だけは実感したところでありました。

とりあえず、優婆夷の登場から始まり、魔女が魔王を仏教に帰依させた、というところまで読んでまいりました。女性という身分の低い人が身分の高い人を教化するという出来事が、末法には起こってくるということを示している事柄ですね。一番最初に『涅槃経』があって、ここでわざわざ「優婆塞」外しておいて、次に「優婆夷」(女性)が出てきて、その後に「魔女」の話が出てくるわけです。

そういう出来事などを通して、仏法と世法をどう見ていくのか、そういう課題が『末巻』で提起されていると考えておりました。

この『日蔵経』の部分と次の『月蔵経』の部分とそれぞれのテーマがあるようであります。『日蔵経』の部分は女性・人種差別の課題を取り上げたことでした。それは『本巻』の御自釈「穢悪・濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る」という言葉の根拠として、引用されたのだろうと思っています。その「僧尼の威儀」が『涅槃経』・『日蔵経』の部分、そしてそのことは、現実に「恵心尼」の存在があったということを外しては考えられません。また「末代の旨際」ということは、次の『月蔵経』であきらかにされていると考えています。それをこれから探っていきましょう。

課題56 『月蔵経』の引用された意味を探る

(1) さて、今日はp372の〔『大方等大集月蔵経』巻第五「諸悪鬼神得敬信品」第八の上に言わく〕から読んでいきたいと思えます。

その前に、『坂東本』では、この前で一行空けてある(らしい)。この意味は『日蔵経』と『月蔵経』を分けている、だけの意味か? 『坂東本』は草稿本だから、単なる目印だったのかもしれないが、私は個人的には『月蔵経』全体で一つのテーマがあって二つを区切っていると考えています。

ともかく、ここからp385一下3まで長らく『月蔵経』の引文が続きますね。そしてそのあとの行、『華嚴経』の引文が引かれますが、原本には「華嚴経に言わく」と言わずに「また言わく」というように『華嚴経』をカットしてますね。

これは何を意味するか、といえ、『月蔵経』の延長の文として使われているのではないかと考えられます。そう致しますと、この(華嚴経)文が『月蔵経』の結びの文とみることが出来るのではないかと、思

うわけです。そういうわけで、ここの「占相を離れて、正見を修習せしめ、罪福の因縁を信ずる」という視点に立って『月蔵経』を見ていきたいと考えています。

(2) 「かの邪見を遠離する因縁」(p 372-下 5)

まず、ここの登場人物は「仁者」であります。これは私たち人間を指していますが、もっと意味づけをしますと「仁の徳を備えている人」となります。当時の知識人ということになります。『後序』の文でいえば「諸寺の釈門・洛都の儒林」を指しているのでしょう。

そうしますと、この「仁者」が持っている‘邪見’から離れる因縁が説かれていることになりますね。ここに「かの邪見」と次のページに「この邪見」とあります。原本でいえば、「彼ノ邪見ヲ遠離スル」と「是ノ邪見ヲ遠離スル」というように「彼」と「是」と使い分けられています。

とするならば、「是」の時は、邪見が身近にあることを意味します。ということはこの十種の功德の中に示されているということだろうと推測されるわけです。それを拾い上げると、三の「天神を信ぜず」、四の「歳次日月の吉凶を扱はず」、五の「悪道を離れる」、七の「世俗を棄てる」、八の「断常見を離れる」、ということでしょう。このことから何を読み取るか、ということでしょう。

そう致しますと、p 373-2「この邪見を遠離する善根をもって……その国に來生して天神を信ぜず、悪道の畏れを離れて、彼にして命終して、還りて善道に生ぜん」というところに尽きるわけです。ということは、この文章では外道を離れて正道に立ち返ることが願われているということなのでしょう。

しかし、なかなかそうはいかない、というのが次の段ですね。

(3) 「悪鬼神に生まれる因縁」(p 373-下 2)

ここで述べようとしているのは‘難’ということですね。そして次の三行の文、これが‘難’の姿である、というわけでしょう。そして、‘正法を聞くことが得られること、そしてそれを習得することは一番難しい’と言われてますね。

「かの悪鬼神は、仏法を聞いて決定の信を得ても、彼はまた悪知識に近づき親しんで、他人の過ばかりを見るようになり、この因縁で悪鬼神に生まれたのだ」と釈迦は説法されるわけです。ここの「また悪知識に近づき」というところがキーポイントだと思うんですね。要するに、「悪鬼神衆の中にして」という言葉が二回出てきます。そういう中で仏法を聞き信を得ても、また‘悪知識’に近づいてしまう、ということですね。

これは「異執」ということを、親鸞は読み取っているのではないかと思うんです。なぜそんなに執着するのか、といえ、一つは「悪鬼神衆の中にして」ということですね。すでに環境が悪鬼神衆の中だった、というわけです。第二に「心に他者の過」だけを見てしまうからでしょう。人間は他者を責めるのは実に気持ちいいものですから。つまり‘異執’に囚われ続けていく因縁を「心に他の過を見る」という言葉で的確に述べていると感ぜられます。

ともかく、ここまでの二段は邪見を離れることを奨励し、そうでなければ悪鬼神になってしまうぞ、という警告を発しているように考えられます。ところが次の「諸天王護持品」第九が厄介なところですね。

(4) 諸鬼神の分布配列は釈迦の行い

次の「諸天王護持品」は随分長いので、何を言わんとしているか、読み取れない懸念がありますので、ちょっと区切って読んでいきたいと思えます。

まずは、p 377-6まで区切ってみたいと思えます。この文は、釈迦が世間を示すために、(娑婆世界の主)梵天王に「この娑婆世界を誰が守り発展させているのか」と尋ねるわけですね。この「世間を示す」ということの意味は何か。このことを念頭に置きながら読んでいかなければならないと思っています。

そう致しますと、東西南北、四天下の王たちが、その下にいろんな配下を置き護持養育している、と述べています。(p375-11まで) ここの書かれている中身は全くわからないんですけど、この‘七宿’というのはインド・中国に伝わる占星術(宿曜道)で、二十八宿の星座がありそれを東西南北の四つで割ると七宿になるという古代天文学の説だそうです。

ここまでの話は、宇宙の支配構造・秩序構造を述べているわけですね。ところがこの次から現実味が帯びてきます。南の閻浮提、これは私たちの世界を示しているわけですね。といっても古代インドの世界観ですが、ここから国名が出てきます。

ここでは何を意味するのかといえば、「この南方世界には釈迦が出生され、国民も勇健聰慧にして梵行も仏に相応しているの、優れている国です。ですから四大天王は、他にも増して護持養育しているのである。」と述べているわけです。そして十六の大国を四つに分け、具体的な国名を出して四人の天王が家来を引き連れて、それぞれ四つの国を護持養育していく、と述べられていきます。

次に行きますと、「過去の天仙、この四天下を護持養育するために同じような分布配置をした。」と述べ、そして「釈迦が出生された後には、国土や村落、建物や林等々、海や神聖な場所に至るまで、龍・夜叉・羅刹・・・という諸鬼神たちが四生の形で生まれて分布配置されているが、どこにも所属するところもないし、他の教え(命令)も受けてはおりません。ですから、願わくは世尊よ、この諸鬼神たちを配置させ、一切衆生を守らせてください。そのことがわれらの喜びであります。」というわけです。

それに対して釈迦は「あなたの言う通りである。」というわけです。そのことを繰り返して『偈』をもって述べていきます。

ここで述べられてくることは、「天神等の違いを見極め、願いを込めて仏が分布せしめられたのである。衆生を憐れんで正法の灯をともしられているのである。」ということですね。

このことから、私たちは何を読み取るのが課題になってくるのではないのでしょうか。

(5) 占星術の当時(親鸞時代)の位置

ちょっと歴史を紐解いてみたいと思います。まず、平安時代といえば、天台・真言の仏教が入ってくる時代ですね。そしてそれに遅れて‘御霊信仰’が盛んになってきます。というのも700年後半から900年近くまで(台風・水害・干ばつ・地震・火山噴火等々)いろんな災害が起こってきます。それで京の町は怨霊の祟りという考えが流行していきます。朝廷は「陰陽寮」を設け京の町をお祓いしていくようになります。そこで陰陽道が大活躍していくことになっていきます。ご存じの安倍晴明などの陰陽師が登場するのも平安中期ごろですね。

ここで『ウィキペディア』で紹介しておきます。

陰陽道は、古代の中国で生まれた自然哲学思想、陰陽五行思想を起源として日本で独自の発展を遂げた呪術や占術の技術体系である。陰陽道に携わる者を陰陽師と呼んでいたが、後には陰陽寮に属し六壬神課を使って占いをし、除災のために祓(はらえ)をする者全てが陰陽師と呼ばれるようになった。陰陽師集団を陰陽道と呼ぶことがある。5世紀から6世紀頃、陰陽五行説が仏教や儒教とともに日本に伝わったとき、陰陽五行説と密接な関係をもつ天文、暦数、時刻、易といった自然の観察に関わる学問、占術とあわさって、自然界の瑞祥・災厄を判断し、人間界の吉凶を占う技術として日本社会に受け入れられた。このような技術は、当初はおもに漢文の読み書きに通じた渡来人の僧侶によって担われていたが、やがて朝廷に奉仕する必要から俗人が行うことが必要となり、7世紀後半頃から陰陽師があらわれ始めた。

7世紀後半から8世紀はじめに律令制がしかれると、陰陽の技術は中務省の下に設置された陰陽寮へと組織化された。陰陽寮は配下に陰陽道、天文道、暦道を置き、それぞれに吉凶の判断、天文の観察、暦の作成の管理を行わせた。また、令では僧侶が天文や災異瑞祥を説くことを禁じ、陰陽師の国家管理への独占がはかられた。平安時代以降は、律令制の弛緩と藤原氏の台頭につれて、形式化が進んだ宮廷社会で高まりつつあった怨霊に対する御霊信仰などに対し、陰陽道は占術と呪術をもって災異を回避する方法を示し、天皇や公家の私的生

活に影響を与える指針となった。これにともなって陰陽道は宮廷社会から日本社会全体へと広がりつつ一般化し、法師陰陽師などの手を通じて民間へと浸透して、日本独自の展開を強めていった。

日本の陰陽道は、陰陽道と同時に伝わってきた道教の方術に由来する方違、物忌、反閏（呪術的な足づかい、歩き方）などの呪術や、泰山府君祭などの道教的な神に対する祭礼、さらに土地の吉凶に関する風水説や、医術の一種であった呪禁道なども取り入れ、日本の神道と相互に影響を受けあいながら独自の発展を遂げた。8世紀末からは密教の呪法や密教とともに新しく伝わった占星術（宿曜道）や占術の影響を受ける。

まず、天文学とか暦学などは（遅れているにしても）自然科学の領域なので否定（抹殺）するわけにはいかない、ということが第一にあります。いろんな天体の配置も秩序だっているし、現に星座として存在しているわけです。そしてその秩序によっていろんな国が守られ育てられているんだ、というのは、行ってしまえば自然の恵みでしょう。ですから一応自然環境のこととして理解できないことはないのであります。先頭の「世間を示す」というのはそういう秩序を示しているのだ、ということなのではないでしょうか。

続いて世尊は「重ねてこの義を明かさん」と思われて『偈』を説くわけですね。この偈の内容は何か、といえば、「誰が護持養育しているのかというならば、いろんな天人や夜叉や鬼神である。しかしそれを分布配列したのは、この釈迦である、衆生を憐愍するため、正法の灯をともしために配列したのだ」と言われるわけです。

当時は、仏教と全く切りはなされて陰陽道が盛んな時代だったのでしょうか。そういう背景の上で、‘外教の異執’として取り上げているのだらうと思うのです。天台や真言もすっかり乗せられていくわけです。それらが、前回申しました念仏弾圧の『延暦寺大衆解』の内容にも組み込まれていたのではないかと想像するわけです。だからあえてこの『經典』を引用してきた、と。行ってみれば「外教の異執である」と。

（『延暦寺大衆解』を読んでいませんので単なる想像ですが）

（6）p 377-7「清浄^し土」か「清浄^ど土」か？

ちょっと文献学っぽくなりますが、聞いてください。

ここで釈迦が「・・・言わく」から始まりますが、そのセリフの部分は「清浄土を了知するに、・・・」と始まっていきます。大蔵経（大正 13、p 342c）には「了知清浄土」とあり、そうしますと「了知を持つ清浄なる人よ」という月蔵菩薩への呼びかけの言葉となります。この『聖典』では「清浄なる人を了知すれば」となっております。

この‘清浄の人’は誰かとなったときそれぞれ出てくる三人の仏になってきますね。そしてもう一回（p 378-7）「清浄なる人を了知するに」と繰り返されていますね。そして登場してくるのが釈迦仏本人になっているわけです。そうすると、これは釈迦自分のことを‘清浄の人’と呼んでいることとなります。ちょっと、この読み方には疑問が残ってしまいます。やはり「清浄の人よ」という呼びかけのほうがスッキリいきますね。

これを『坂東本』では「清浄土」と書かれています。また p378 - 7 の部分は『高田本』では「ト」と送り仮名が打たれています。親鸞はどちらも「清浄土」と読まれたであろうと推測できます。

そう推測しますと、それぞれが出興された仏の国土（清浄土）がどうなって行ったのかを了知すれば、という読みになっていきます。そして人の寿命が四万歳からどんどん減って百歳になるまで白法は尽きてしまい世に諸悪が遍満してしまっている、その世に私（釈迦）は出生して、護持養育のために諸天神達を配属させたのであると述べられます。

したがって、ここは「仏が在しますところ」という意味を強調せんがために「清浄土」と読み替えている

のではないかと想像されます。そして、たくさんの菩薩や無数の天神・鬼神達、そしてこの娑婆の人たちが、ここに来集しているのである、そしてここで仏法を説き、世間を守らんがために鬼神達を配置しているのである、と説かれているわけです。すなわちここで「娑婆仏土」と繰り返され呼ばれているように、かつてこの世界は、仏国土であることを強調されていると思うのであります。

そしてここでも、一貫して釈迦が主導権をもって鬼神たちを分布安置した、とするわけです。

(7)「過去の諸仏、誰に付属して護持養育をなさしめた」のか？

次の文章に入って行きたいと思います。次は「その時に」からはじまります。その「時」というのは、釈迦が鬼神をもって分布配置したんだ、という時点ですね。この時点で、釈迦が娑婆世界の‘主’に問うわけです、「過去の諸仏たちは、誰に付属して護持養育なさしめたのか」と。

つまり、仏が主導権をもって鬼神たちを配置して護持養育すべきところ、過去仏たちは誰かに配属されて護持養育をしている、と問うているわけです。そして‘主’たる大梵天王は「過去の諸仏は、我および憍尸迦（帝釈）にしたまえりき」と答えます。

ここで、また横道に反れますが、この文章の前後、親鸞独自の読み方が、三ヶ所指摘されているところがありますので（『現代教学』第10・11号—教研東京分室）ちょっと紹介しておきます。

- ① p 379-2 「悉將眷屬於此大集」という原文です。この「將」は「率いる」と読みますので、普通だったら「ことごとく眷属を率いて此処に大集せり」となるべきところを「ことごとく將に眷属として」と送り仮名を透けております。
- ② p 同-8 「令作護持而我失、不彰己名及帝釈名」という原本です。この「不」の位置ですが、「彰」につけて「あらわさず」と読むほうが自然ですが、前の文につけて「我、失ありやいなや」と親鸞は読んでいます。
- ③ p 同-11 「於如来前不自称名」という原本です。これは「如来の前に於いて、自ら名を称せず」と読めますが「坂東本」では「如来の^{みまえ}前に於て、^{みづか}自ら称名せ^ぎ不らんや」とルビを振っております。

ほかにもあるようですが、親鸞独自の読み方によって明らかにされてくるのは、天人鬼神らが主導権があるのではなく、仏が主導権を持っていることを示しているわけです。

そのあとに、梵天や帝釈はそれに気づいて謝るシーンが描かれていますね。ここで「大徳婆伽婆」（釈迦）と「大徳修伽陀」（仏弟子の一人莎伽陀ともいう）とそしてここに集まっている「諸来の大衆」に対して謝っているわけです。そして「我、境界において言説教令す」と告白し、これからは「護持養育いたします」と申し述べております。

そうしますと、釈迦は「善いかな、善いかな」とほめるわけですね。そしてp 381-下4「重ねてこの義を明らめんと欲しめして」『偈』を説いて繰り返し示していこうとされるわけです。

「この義」というのは、最後の行p 383-5「諸悪の朋を遮障して 善の朋党を護持せしむ」ということを示しているのではないのでしょうか。

以下の引用文は、無数の天神や諸魔たちも、ことごとく仏法を護持し、仏道を歩むものを守り、出家者であろうと非道を歩むものに罰をあたえる、などというような文面が述べられ、（華嚴経）の一文に結ばれていくと思われるのであります。

この一文は「占相」という世法と「正見」という仏法の対峙と「罪福の因縁」という自然の摂理を結びの言葉とされているような気がしてならないのであります。今回はここまでにしておきましょう。

*以下の様々な出典の引用も、ほぼ同じ世法と仏法の対峙がテーマになっているようです。そして、その

問題が、インド・中国（朝鮮）そして『後序』の文で日本という世界観をもって「異執」を述べていこうとされていると考えています。